



旧那覇市

宮城 聡

時 一九七一年一月十四日
場所 東恩納文庫にて

氏名 現住所

嘉手納 宗徳



嘉手納 宗徳 (三十一歳) 久茂地小学校職員

久茂地、上の山、松山の三小学校の第一回の疎開。それは後で聞いた話だが、その籤を引いたのは校長なんですね。各校長を集めて、三枚しか行けないが、ということで抽籤にした。そうして上の山の校長がまず当てた。非常に大喜びであったらしい。これはそのの教員が話していた。それから松山、久茂地がそれを引き当てて、第一回はその三枚だけ。海防艦というのがあったはずだ。しかもそれが普通の商船を改造したやつで、装備は普通の軍艦並みではなかったと思う。人員がそれだけしかもあ収容することができん、人員ははつきり憶えてないんですがね。

そしてそれが多分十九年七月のなかばだったろうと思うんです。ところがこれが無事着いた。軍艦だから早いんですよ。無事九州へ

ついたという知らせでみんなホットしたわけです。二回目が八月の例の対馬丸事件の二十二日。わたしは当時久茂地小学校で、疎開事務を担当していた。それで八月二十一日に市役所各学校の係りが集まったんですよ。その中には当日対馬丸で出発するという教員もいたわけですよ。その連中が、前知らしとでもいうんですか、何か予感がしたんじゃないかね。わたしに、久茂地はよかったですね、われわれは軍艦ではなく、普通の商船で、何だか気になりますよ、といっていました。二、三名で。そうしてあの船団の中から対馬丸だけやられた。残ったのは各学校で数名の生徒、あとみんな死んだ。

そうして対馬丸で犠牲者を大勢出した結果は、今まで相当応募していた学童疎開というのがね、ほとんど影をひそめた。いくらすすめてもなかなか行かないんですよ。まあ、それでもやると五六十年ぐらいまとめたのが九月の末頃です。そうして引率教員も最初に行ったのが優秀な若い連中が主であったんでね、これは(若い連中)なかなかない。それで結局わたしが当てられた。引率教員は各学校一人ずつでわたしもその一人に当てられたわけですね。それが十月十日が久茂地校の二回目の疎開の日だったんです。だからその前日呼ばれた時も、乗り込むことになっている駆逐艦の艦長が、状況は緊迫しておるから絶対安全という保障はできない、その代り全力を尽してできるだけ無事に届けるようになるから、とはいっていたがね。兎に角不安でしたな。

そして出発が奇しくも十月十日。それがね、従来の疎開は集合が午前五時ですよ、そうして午前八時乗り込み。ところが幸いとい

ましようかね、十月十日の疎開の日は、集合が午前九時、乗りくみ開始が午前十一時だったんです。もし従来の通りにやっていたら、港で集合しているところで、空襲にあっていたでしょうな。まあ、それは幸いだったといいいいでしょうね。で、わたしも朝早よう起きて疎開出発の準備をうちでしていた。家内が真和志村の銘煎出身だったもんだから、実家へ挨拶に行けといっって帰したのが午前六時半頃。

ちょうどその頃、泊高台にある高射砲陣地から高射砲の発射があったわけです。最初空襲とは気がつかなかった。そのころ寒露の季節で鷹が渡っていた。その鷹に向かって高射砲が炸裂するようにわたしは見たんです。それでわたしは、鷹の群に対する実弾発射演習かなと思っただけです。ところが間もなく、爆音が聞こえ、飛行場、那覇港あたりが爆撃されておることがわかった。その炸裂する震動がね、松山町のわたしのうちにまで伝わって、二階が相当に揺れましたよ。それで疎開へ行くことになってしたのは、わたしと家内と母なんですよね、弟はずでに東京に行っている。だから家内は実家に挨拶にやっつて、うちには僕と母と二人残っていた。

それで空襲がはじまったもんだから、わたしは母をおいたまま、学校へ行っただけです。これは大変だと思っただけ。学校へ行ったら小使はお茶を沸かしている。駐屯している兵隊も平素と何も変らな、わたしが空襲だよといっつても、びんと来ないらしくてね。間もなく指令が来て軍隊は右往左往だったんですが、そのうちに教員が数人集まって来る。空襲の対策というのは結局は何をやっつていいか実際わからんですよね。もし焼夷弾でも落ちて来たら、火を消し止

(町)、その一帯に中心が移って来ている。それでわたしは自転車を走らすことができんもんだから学校の塀のそばに自転車を持ったまま立っていた。ちょうど上にガジマルの枝が張っていたので、その陰に身をひそめて立っていた。すぐ隣に電気会社があったんです。そこへ、あの焼夷弾がヒューヒュー飛んで行くんですよ。そして火の手が上がる。

それでわたしは空襲の隙を見て、久茂地、今のわたしの家のうしろ付近です。塀沿いに自転車を飛ばして行っただけ。そして、墓地下、今の子供博物館の下がわになるけれども、その墓地地帯の近くにかかった時にはもう、飛行機が群がり、進んで行くことができな。それで墓地のそばの古巴梯子コウバデジがあって、その下にしばらく立っていた。

ふと見たら墓の中にいっぱい人がいるんですよ。それでわたしもその中に入ろうと思っただけ、しばらくわたしもそこに入れて下さいな、といっつて入ったんです。そうしたらひどかったね、焼夷弾投下、もうボンボン来るんですよ。それでわたしは、その墓地の裏がわに弾薬集積所があるのを思い出してね、あれが炸裂したら大変なことになると思っただけ、墓の中にいる人たちに、ここにいたら危いから、もつと安全なところに行きなさいといっつて、わたしは飛び出て行っただけですよ。そうしてもといった素掘りの壕に入っていたんですかね。

空襲の翌々日、そこを訪ねたら、僕が入っていた墓の真上に爆撃の直撃があったな。ところが不思議なことに、墓の上は亀甲でも破風でも格構はちがいますが、中の構造を見たらね、すべてアーチ

めようというくらいのもりで、学校の中にある素掘りの防空壕にしばらくいたわけですよ。ところがどうも気になるもんだから学校の近くにある墓地の上にある素掘りの壕に移って行っただけです。

ところが時間が経つにつれて空襲が熾烈になる、そして午前の八時九時の頃は、空襲の中心が那覇港付近だったと思っただけ。大きな炸裂音がする。その炸裂音はね、わたしには、何千何万枚という硝子をいっぺんに割るような音に聞こえおった。パシヤッといいう大きな音がね、ドカンという音ではないんですよ。

そうして見ていると、黒煙が立ち上っている、火の手が上っている。だんだん美栄橋あたりに近づいているように見えるんですよ。最初は西(町)東(町)が中心、それが泉崎から久米あたりへ移って来る気配があるんですよ。

まあ、それでわれわれは別に学校がやられているんでもないのでただ見ておるだけ。その中に昼飯時間が来たもんだから飯を食べにうちへ帰ったんです。うちに行ったら母はいない。隣の人に訊いたら、銘煎に行っただけ。それで安心したんです。それから飯を食べて、学校へ行ったら、隣に職員の家がいてね、その家族に飯は食べたかと訊いて見ると、まだという。じゃ、うち行って取って来るからね、といっつてまた学校へ下りて行っただけです。ちょうど裏門に入る時に爆音が聞こえたよ。それにかまわず、自転車を置いてあるところまで走って行って、自転車で乗って学校の門を出たときに、超低空で機銃掃射がはじまった。耳のそばを機銃弾がかすめて行くんですよ。ヒュー、ヒューと。そうして時間は昼すぎになりますけれども、空襲が今度は、久茂地から若狭(町)、松山

その爆弾が、勿論小型爆弾だったんだが、爆弾がそのアーチを通っていない。そこで喰い止まっている、下までとうってなかった。

墓というものはずいぶん強いなと思っただけ。中を見たら人は一人も死んでいない、だからわたしが出た後に、他の人はみんな出たんだなと思っただけ。それは翌々日見たことですがね。

そうしてわたしは、素掘りの壕に入ってからほんどに頭を上げることができんぐらい、飛行機の空襲がひどくなつてね、一、二時間くらい、顔も出すことがきんほどでした。あんまりひどいんですよ。時どき機銃が、耳のそばをヒューヒュー飛んで行く。そして午後の三時頃だったかね、一応空襲が止んだので、素掘りの壕から立ち上って見ると、校舎の三か所から火が立ちのぼっていた。わたしは校舎の中に走って行きましたよ。いっつてみると、学校の付近も火の海。そして学校はこれからまさに焼けようとしている。それでわたしは、ひとりではどうにもなるもんだではないと知りながら、やはり学校が最後かと思うと、いたたまれなくなつて校舎に入っていた。それから消防器具が何かないかと思っただけ。また取り出すべきものもあるんだらうが、まあ、ひとりではどうにもならん。それで一巡して、また素掘りの壕に引返して来た。

これは後で聞いた話だがね、ある若い教員が、わたしが校舎へ入って行くのを見て、出るのを見なかつたらしい。それで翌日か、翌よく日か、校長のうちに行って、嘉手納先生は学校が焼けはじめから学校に入っただけ、出て来なかつた、といっつたらしい。うちへ帰って行っただけ、軒下に消炭でね、「宗徳、校長に連絡せよ」と書いてある。何のことかと思っただけで見ると、教員が十名くらい

集まっていたが、みんなびっくりしていた。君元気がだったのか、実はこうこう話があった、君のことを心配していたという。

まあ、そういう話がありました。それが三時頃だね。それからわたしは、今の浮島通り、あの当時は浮島通りの市場付近はその道の両がわとも田や畑。そこを通過して、それから今の平和通りに出た。

ところが、どこもかしこも暗渠という暗渠、墓という墓、すべていっぱいですよ、人が。それでどうにもならんから、家内の実家に行こうと思ってね、今の国際劇場がある。その付近を通過して行くかと思つたら、両方焼けてとても通れん。熱気で大変ですよ、火が。とてもつつ切ることができん。それで今の沖繩三越がある、あの頃あの辺は、ちよつとした丘なんかのある畑ですよ。そこをつつ切つて崇元寺に行こうと、十貫瀬に出た。その十貫瀬も燃えているんですよ。それから人の屋敷の壊れたあとなんかを飛び越えて、やつと崇元寺に出た。

そこから泊の黄金丘の上に行つて、ひと休みして焼ける那覇の市街を見ていた。それが午後の四時頃です。

そうしてわたしは家内の実家に出かけて行つた。あつちへ行つたらね、母が来ていないんですよ。話では午前十時にはうちを出て銘苅へ向かっているから、とうに着いていなければならん。まだ来んというもんだから、大変なことになったと思つて、僕は水を一口飲んで、じゃさがして来るといつてすぐ出かけた。さいわいに途中であった。泊と銘苅との中間で。事情を訊いたらね、うちを出て前島まで行っている所で、空襲にあつて、どうしても動くことができなかった。

もうその時はほんとに恐しくてね、警察はどこへ行けという当てはないですよ。ただ漠然と街頭の安全なところへ行けという命令だね。それで家内の実家の家族、わたしの家族入れて十名ぐらい、もうみんな大騒ぎだ。どこへ行くというあてはなく、ただ行くというんです。わたしは反対したんです。家をあけてどこへ行くか。だがみんなは行くというもんだから、じゃわたしひとり残るといつて、わたしひとり残つた。みんなはあてもなくただ行つた。

それで私は淋しくもあるし、恐くもあるしね。山羊や牛に草をやつたり、ひとり飯も食べて、ほんとに忙しなことだと思つたんです。それで物笑いになるか知れんが、ひとり竹槍操練しておつた。

翌日の十二日にわたしは那覇へ下つて行つたんですね。途中で在郷軍人の分会長にあつた。在郷軍人もどこへ行つたかわからんという話、それで学校へ行つたんですよ。焼け跡を見たら、完全に灰です。一物も残らん。

その翌日の十三日、また学校へ行つた。銘苅に泊つておつたんですよ、十月いっぱい。途中で県視学とあつたんですよ、県視学は僕の顔を見ると、嘉手納君、なにをボヤボヤしておるんだ、なぜお前、国頭行かないんだ、と僕にいうもんだから、わたしは少しむつとしてね、「教員は勝手に任地を離れていいんですか」と、僕は大声で言った(笑い)。「これから学校へ行くつもりです」(笑い)。ナンセンスみたように思うんですけど、あの時は気が張っているもんですから、わたしはこれから学校へ行きますといつて、学校へ行つたんですよ。

もんだから、他人の屋敷の素掘りの壕に入つていたと。ただ掘つた壕です。天井がないわけですよ。そこに何時間ですかね、五、六時間ぐらいついていたんですよ。

母にあつたもんだからもう一安心ということで、僕はうちを見て来ようといつて、そのまま泊の方へ下りて行つて、那覇へ向かつて行つた。泊高橋と潮渡橋との中間のところを泊兼久といいますがね、今の一号線、そこへ行つたら、両がわ火災で、道は通れん。それから湯原へ出て、やつとうちへ辿り着いたら、うちの手前まで全部焼けて、私のうちが縁がわからまきに焼けようとするところであつた。それで急ぎ消し止めてうちは無事です。うちで消し止めたので、うちから後の方は全部助かつた。うちのすぐ手前までは全部焼けたんですがね。それからわたしは、うちの中を少し整理して、夕方また銘苅に引き返して行つたんですよ。その晩は銘苅で泊りました。

これが十月十日のわたしの体験なんですがね。十月十日の空襲はあまりに衝撃が大きかつたか、何か知らんが、恐怖感が無いというのはおかしい話ですが、そんなに恐いという印象は受けていなかったな。

ところが銘苅に泊つた翌日の十一日、その日がほんとに恐かつたんですよ。空襲の翌日だからまあ、人心は動揺していたがね。朝飯をすまして、みんな話し合つているところへ、警察部長命令でね。午前の十一時頃でした。緊急立ち退き命令、その命令によると、敵の機動部隊が接近しつゝあり、そして前日の空襲以上のものがすぐ来るから、安全なところへすぐ避難せよという命令です。

その日子供たちが数名来ていました。焼け跡に茫然となつてね。わたしの組の子供も二人来ていた。わたしは、どうだ学校はこんなになつたが、また授業やつて見るかといつたら、子供たちは賛成したですよ。君等の付近に生徒はいるかと訊いたらおるといふ。じゃ連れて来い、あしたからやるからといつて、そうしてはじめてのが青空学校。まあ正式にやつたのは、もう少し後になってからと思つたんです。最初は学校の焼け跡整理を、焼跡整理がついてからは焼跡を耕して野菜を植える。校具は何もない。ちよどど学校の周囲には墓が沢山あつたので、その墓の庭にね、最低二十名ぐらいは坐れますから、一学級ごとにそこに入れるんですよ。墓の壁に消し炭を持って行つて、それで字を書いて教える。体操がすんだらそこにつれて行つて授業をはじめます。それがずいぶん続きましたね。青空学校、わたしがとよりわたしたちがというのが適当です。教員もその頃十名ぐらい集まつていましたからね。生徒も二百名ぐらい来たんですよ。こうして授業をやりました。そうしてさっきいふ県視学、やはり視学になつてN Kさん、それからK Sさん、その三名はいっしょに県庁へ登庁していたからわれわれが授業している青空学校を見ておるんですよ。新聞にも久茂地小学校の青空学校と出たんですよ。

それで疎開のことですが、十・十空襲の直前までは、例の対馬丸の影響を受けて、疎開はすすめてもほとんど行かなくなつた。それが十・十空襲で徹底的に打ちめされた。それからまあみんな、われ先きに疎開するといつてですね、あとでは船に乗りさえすればいい、という考え方にまで変つていた。商船なんかでとても行け

ないと思っただけは、機帆船を借りるんです。何かかてね、それをチャーターして行くのもいたんです。とにかく、船に乗って那覇を出さずればそれでいいところまで変っていたんです。

それで青空学校の生徒も減って行く。その中から疎開するものもある。だが大部分の生徒は沖繩に残った。国頭にも一部行ったが、学校周辺にいたのが多かった。

そのころB49は連日のごとくくるが、それは馴れっこになって、あれは爆弾も落さん、偵察くらいに思っている。空襲警報はかかるけれども僕等は逃げない、青空学校は一応二月の十五日まではつづいた。

それから県からの指令が出てね、もう情勢が非常に悪化した、これ以上学校の授業が出来んといっている。もう学校解散といったら大袈裟だが、とにかく学校の生徒は父兄と共に、安全のところへ避難するよう、教員も年寄り、女、不具者は安全なところへ避難せよ。若い元気なものは、学校の仮事務所に残って、待機せよ、命令があるまでそこで待っておれ、という指令が出て、今の壺屋のね、あれは沖繩陶器という名であった、そのすぐ上に拝所があった。壺屋で「西の宮」といっているが、その広場で学校最後の解散式をやったですよ。空襲が頻繁になりましたが、学校の集会所をそこに移してあった。はじめは学校であったが、もう学校が危険だといってね。それからそのそばには横式の壕が沢山あったが、いざという場合は全校生徒を入れるくらいの壕だったんですよ。それで二月十五日に解散した。わたしはそのまま残ったんで、毎日出勤。

には一日一べんは出るが、泊るのは銘苅だったんです、ずっと。

それで人口課に勤めている時、最初の一週間、わたしは輸送係りというのを仰せつかったんです。どんな仕事かと申しますと、那覇・首里・南部あたりの人たちを、北部へ立ちのきさせる、まあ、疎開だね、その督励係りということですよ。それでこれには、警察部の輸送の職員、たいてい警部補なんか来ました。それといっしょになって、汽車に乗せたり、トラックに乗せたりして送ってやるんです。それを一週間つとめていた。それでわたしの手帳には、毎日のその委しいメモを書いてあったんです。それは約一週間で、わたしは何月何日島尻の何村、何村、何村が何名、国頭の何村、何村へ移動した。その記録をね、約一週間。

それからつぎの週からは、職をかえられてね。今度は県外疎開の船の交渉。ちよつと心配だったんですが、毎日港へ通う。港の付近は、遮蔽物がない焼野が原になって、飛行機が来たら隠れるところがないんです。港は船が来たら爆弾落されるのは確実。そこへ毎日行くんです。それでわたしは自転車に乗って、毎日、海軍運輸部隊とか、陸軍砲部隊（船舶部隊）、それに商船会社へ。商船会社は、あの頃、那覇農園壺川の、そこへ移していました。そこへ毎日船の消息を訊きに行く。それでその消息をまたメモするんですがね、毎日。例えば今度来る船団は何船団、船は何丸、何丸、トン数は何トン、収容人員は何名、その委しいメモを毎日手帳に書き込んで置く。そういう仕事をずっとやっていました。後になっては毎日ではなくて、時どき行ったようであった。最後までそれをやっておりましたね、別の仕事をやりながら、それ専従ではなくて、そうして

それで二月の十九日に、県からの命令でわたしは、県教学課に任命されたんです。ただし久茂地小学校訓導、沖繩県教学課嘱託。俸給は学校から貰うんです。それで教学課へ十九日に行ったら、教学課は午前中で終りでね、教学課の職員だったさっきの視学、NKさん、KSさん、それからわたし、もう一人、やはり久茂地の教員だった女の先生でありましたが、その五名、十九日の午後教学課から人口課へ移された。それが当時の二大重点事業というのかね、人口調整、食糧確保ということだね。その総本部に当るのが人口課なんです。人口調整のそれが非常に忙がしいからというので教学課から廻されて、結局わたしは教学課に勤めるようになったんだが、実際は人口課に行った。

その頃県庁の建物は空襲では難をのがれていた。ところどころがやはり爆風のおおいか、崩れかけているところもあった。今立法院のある瓦屋（地名）、あの辺も民家はほとんどのこっていました。十月十日の空襲で災害受けていない。ところが県庁は分散、あの頃は警察部だけが残っていた。その庁舎内には。

十月十日の空襲直後は、普天間に移動したんですよ。それでわたしは、久茂地小学校から普天間に俸給を取りに行ったことがある、歩いてね、往復。でわたしが人口課に入る頃は、人口課の事務所は、今の那覇高校、戦前の二中の同窓会館跡、焼け跡、そこで人口課の事務をやっていた。わたしは毎日そこへ出勤。教学課は、刑務所の隣りの舞学校であったかな、その事務室を借りているようでした。あそこに半日、あとは二中の同窓会館跡の事務室で、最後まで事務を取っていました。それでわたしは毎日銘苅から通って、那覇

疎開の話をしに、あちこち出かけて行くんです。わたしが行ったのは小椋村と玉城村。

小椋村に行った時は吃驚したことがありました。あんなに魂消たことはなかったです。どういうことかといえますと、わたしが県庁の車に乗って、出かけて行ったんです。そうしたら、小椋の役場のところに、村民が増列して並んでいるんです。それでわれわれを迎えるには大袈裟。それが村長の部屋に行ったら、そこに奇麗な席が設けられておるんです。村長に訊いたら、今日知事が来ることになっている、例の島田知事が。それで増列して待っている。わたしはそれを知らずに小椋に行った。そういうわけで知事を待っていたが、知事はいつまで待っても来ない、とうとう村長が、知事代理になってくれ、といって、知事席に坐らされた。それから村民が二百名ぐらい集まっておるからそこに行つて話をしてくれといわれ、それでわたしはその講堂に行つて、一時間疎開の講演をした。その中には知っておる顔ぶれがいる。その役を当てられてね、約一時間話して、つぎの一時間は座談会をして。ほんとに吃驚仰天というところだね。

それから、その翌よく日から玉城村へ行ったが、その時はほんとに疲れたね、えらい目にありましたよ。役場で各字の区長を集めて立ち退きの話をしたんです。そうするとその区長連中がね、もうとにかく村民にいくらすすめても行かない。だから、僕に直接何とかしてくれと言われたわけです。それで僕は正直にそれを引き受けたですよ。そして区長連中といっしょに部落へ出かけて村民と話し合いました。それからまたつぎの部落に行くというように。そ

うして一応終ってどこかの字の例の倶楽部というところ、字事務所ですが、そこで夕飯を食べた時は夜の十一時頃、八時頃出かけて行って、夜の十一時頃夕飯をはじめ食べて食べた。またそれからしばらく話ですよ。

そうして玉城村を出る時にはすでに十二時ぐらいですよ。それからわたしは自転車に乗って帰ったら、途中、津嘉山と真玉橋との中間で自転車がパンクした。それを引きずって、うちへ着いたのは午前の五時近くです。翌日はまたいつものとおりに出勤でした。それをみんなに話したら、君はあまりに正直すぎるよと言われた。向こうがいろいろの一生懸命はい、はい、いって何でもやって来たですからね。そういう経験があります、人口課にいた時。

それからやはり人口課にいた時の経験ですがね、課長の浦崎純氏から、陸軍部隊がトラックを出したり、ずいぶん立ち退きに協力してくれた。その礼状を出したいと思うから憲兵隊へ行って、部隊の所在地を訊いて来てくれといわれた。それでわたしは名刺に、久茂地小学校訓導と名前が印刷されてあったが、それにべんで、沖繩県人口課と自分で書いてあったんです。行ったら憲兵隊長は大佐で、名前は忘れたが、最初は丁寧にもてなしてくれましたがね、それがその話を切り出したら急に疑い出した、僕を。それからわたしを見て、教員が人口課囑託というのをおかしいですね、という。しかし僕はねばって、こうこういう事情で……と話して、やっと、大きなところだけはさがしてくれましたよ。これは軍の機密に属するものだから絶対言わないといってたね、その末端までは教えてくれなかった。やっとそれだけを持って行ったら課長は、それでは役に立た

そうして戦争になる前に、やはりさっき言った各村の国頭に立ち退きというのがあってね、わたしの家族をのぞいて他は、全部山原、喜嘉嘉へ行っておるんです。それでわたしと家内と母と三名です。

三月二十三日の空襲、上陸作戦がはじまった時は、この銘苅部落は、組踊りで知られている有名な銘苅川（泉色）、銘苅子伝説のあるところ、そこをシグロク（銘苅川を地元の人にはシグロクともいう）とっておるんです。そこから流れ出る水と上流から流れる水とで川になっておるんです。その川のすぐ下にわたしの家内の実家の田が数千坪あったんです。その対岸の方に岩盤があつて、そこにあらかじめ空襲に備えて銘苅部落民が、横穴壕を掘ってあつたんです。数十名入るぐらいのね。それでアメリカの上陸作戦がはじまつてから、わたしも家族と共に最初の一日、そこに入つたんですよ。ところがもう人が沢山いておるから、僕と家内とはここにいてはもう大変だからうちへ帰ろうという。うちとこことは二百メートルぐらい離れていたんです。うちへ帰って家内と二人だけで二階に住んでいる。それから艦砲射撃で二階がゆれるんですよ。弾は遠いけれども、ちょうどその頃、座間味、例の阿嘉島がやられていた。どこか東海岸でも艦砲射撃がやられておる、そういう遠いところだが、響くですよ。そしてとに角、家に住まっていたが、母がね、危険だといって恐がるんですよ。危いから壕に行こうといつてまた壕へ行ったんですよ。

その頃高いところへ登って海岸を見たら、もう慶良間から安謝の海岸あたりまでね、アメリカの艦船が、四列横隊をなしておるんで

ないじゃないか、もっと委しく訊いて来いという。それでわたしは、僕にはこれ以上はできません。もっと必要ならあなた自身で行って下さい、といつたんです。後で軍の方に訊いたら、その大きなところを言っただけでもまずかったんだそうです。もし君がスパイだったらどうする、それでも一応スパイ嫌疑をかけられたわけです。だが大きなものだけは、何隊、何隊といつてね、訊いて来た。そういうこともありましたよ。

そうして、わたしは三月二十三日に今言った要件で、陸軍のこれまでの協力に対する御礼と、これから後の協力要請、この公文を自分で書いた。

それを持って園比武御嶽の近くの地下壕と、（そこに球部隊の本部がある、有名な長参謀長、その参謀長と）もう一つは、首里の第三小学校へ（右部隊の参謀長）三月二十三日に両方の参謀長のところに僕に行くことになっていた。そしてそれをすましたら君は一週間休暇をやるから家族をつれて国頭に行きなさいといわれた。ところが、その二十三日に沖繩攻略作戦がはじまつたわけですからね。もうとてもそとへ出られるものでない、その文書を持ったままどうとう行けなかつたんです。まあ、それでわたしの人口課の仕事は終了です。

話は前に戻りますが、銘苅に一週間くらいわたしがひとりである間に、義弟が帰って来ましたよ。君等はどこへ行ってたか聞いたら、国頭には行かないで、具志川に行っていたというんですよ。それからうちが何んでもないとおかつたもんだから、ひとり二人と帰って来て、二週間ぐらいでみんな戻って来ましたよ。

す。もうわれわれはすぐ思ったなあ、上陸はここに間違いないとね。そうして向こうの駆逐艦らしいのが、出て来て機関銃でバラバラとやるんですよ。機雷を警戒して、機雷があつたらその弾であらかじめ爆発させておこうというわけでしょうね。近づいて来ては機銃掃射しておる。それをわれわれは高いところから立って見る、いよいよ上陸が近いなと思つたんです。その壕ではNさんも住んでいた。Nさんも向こうには畑地が三万坪ぐらいあつて、屋敷もある。それで那覇が焼けたてからNさんも向こうに住んでいた。Nさんが僕に、嘉手納君、もうみんなここにそのままいて、死ぬのならばみんないっしょに死んだ方がいいじゃないかといつてた。いけません。もうすぐそこに上陸しますよ。そうすると最初にやられる。見すみす、死ぬとわかりながらそこにいることはいけません。今のうちなら山原に逃げられるからみんな今の中に逃げて下さい。わたしもどこかへ行きますと話した。

それでわたしも山原に行こうかと思つたが、家内が反対した、行かないといつて。その頃家内は体が弱っていたんです、歩けないといつて。じゃ、ここにいっても何だから首里に行こうかと話した。やはり考えが少し浅かつたね。首里は最後の陣地だろうと思つたんです。首里が陥れば、もう沖繩全部占領される。それで首里と共に死んだ方がいいんじゃないかと考えたんです。山原行こうが、どこへ行こうが、最後に残るのは首里である。だから首里が落とされたら、沖繩は完全に占領だ。首里へ行こうと決めたんだね。

三キロメートルぐらいあるかな、首里の平良町のフシマントウというところへ行つたんですよ。そこにトントンガマといつて、大き

な自然壕があるんです。それを見つけたのは義弟でした。義弟はね、当時師範学校で、これは兵籍に編入されている、いわゆる鉄血勲皇隊へ編入された。これが時どきうちに帰りながら、そこに大きな穴があるのを見ていた。そこに大きな壕があるから、そこに入りなさいといつてつれに来たわけです。じゃ、そうしようというこゝとで入った。ところが、岩盤が薄いんだよね、下に大きな穴がある、そして横穴がない。もしそこに爆弾が落ちたら全員即死、どうも不安でならなかったが、別に行くところがない。そこははじめしたところまで気が悪かった。最初は四、五十名くらいいたが、それがいつの間にか人がほとんど入って来て、後には二百四十名くらいいた。もうその頃からは空気が完全に乾燥していましたね。もう人の熱気で乾いてね、わたしは三月二十八日に家族と共に引越して来ていた。

弟は相変らず学校と行動をともにして、そこにはわたしの家族三名。弟というのは家内の弟です。その日の午後六時頃、そのガマ(穴)のそばは首里でも高いところでした。慶良間が一瞬のみに見えるわけです。

慶良間沖には、例の敵の艦船がいっぱいいました。そこへ向かって毎晩のように特攻隊が飛び立って行く。夕方、もう日没すぎだからすぐわかるんです。曳光弾が行くんですね、光ってパンパン、パンパンとね。集中攻撃の音がポンポン、ポンポンと聞こえる。それで真赤に火が上ったりするからね、もう完全に敵艦船の轟沈するのが見えるのです。その壮烈な攻撃を見ていたんです。午後六時すぎ、最初は相当に人がいた、十名くらい人がいたと思ったが、立っ

これはこうこうだ、日記についてはこれは当然つけるべきでつけてあるだけのもの、といったら、彼等は、弁解無用、といつて絶対聞き入れてはくれない。

またわたしのカバンの中に例の長参謀長石部隊の参謀長宛の手紙が入れている、それで行くべき用事を、三月二十三日の攻撃以来とちとう行けなかった。今度はこれを出して、これは何か、という。彼等は完全にこれはスパイだといつてね、もうそうなつてはこつちのいうことはぜんぜん聞いてはくれない。いくら弁解しても弁解無用といつてきかん。それでわたしは、言ったですよ。沖縄県立首里高等女学校、工芸学校は後でそういう名に変えてありましたが、その運動場に地下壕がある。その地下壕に県教學課があるから、あそこに行って、僕のことを訊いて来い、そうしたらわたしの身分がどんなものであることがはつきりわかる。この手帳に書いてある意味もわかる、もしあそこへ行つて、誰もわたしを知らんといつたら、お前たちがいう通り掴まつてやる。そういつてから、そのかわり、わたしはどこへも行かん、監視をつけて二、三名いてもいい、どこへも行かん、その返事が来るまでそのままどこへも行かんからといつて帰した。

それから二、三日してから僕を掴まえに来た兵隊たちがまた来た。そうしたらその態度が豹変したな。全くの変わり方、今までスパイだ何だとさんさんのことを言っていたものが、今度は手の平を返すように、先生、先生とおだて上げるんだな(笑い)先生煙草いりますか。と、もう大変のまつり上げようです。後でKさんから聞いた話だが、Kさんの話では、その頃憲兵軍曹という男が来て、僕の

ているのは家内と二人だけ、わたしが振り返ったら、後に兵隊が五、六名くらい立っていた。わたしは何もしていない、ただ見ていただけ。

その攻撃が終わったので、壕に帰ろうと思つて引返して来たら、うしろに立っていた兵隊の一人が引きとめてね、おじさん、懐中電燈持っていますか、写真機持っていますか、と変なことを訊くもんだから、そんなもの持っていないよ、といつて別に気にはしなかった。そうして家内といつしよに壕に帰つて行った。

その晩、家内とわたしと、米の配給を貰うつもりで、一中(現在の首里高校)の門のそばに配給所があったが、そこへ行った。また二、三軒連絡するところがあったので、そこへ行った。

夜間われわれ夫婦が外出している時に、われわれを後から見ていた兵隊六名がわたしをスパイだといつて、掴まえに来ていたといつて聞かされてね。帰つて来たら、すぐそばの人に、君をスパイとして掴まえに来ていたぞと聞かされてびっくりしたんですがね、全く思いもかけないことでした。

それからわたしは、覚悟を決めたんですよ。もし逃げたら、いよいよスパイだと嫌疑が深くかかるだけだ、よし、そこにおつて、つかまつてやろうと思つてね。そして二、三日経つてから、真昼、二時頃だったな、兵隊が四名くらい来て、そこでさんさんこずきまわされてね、スパイだといつて。それでさつき話した手帳、彼等の目から見たらスパイ容疑の記事ばかり。その手帳に毎日のメモ、まあ、日記ですよ、県人口課にいた時の毎日の日記を書いている。これを彼等は見て、これは何か、とつきつけるんです。わたしは、

ことを訊いていた。それに答えるのがKSさん、KSさんが君のことを物すごくほめてやつたと。それで今度は、小奴は使い物になると思つたんだらうな。早速わたしはこの壕の壕隊長にさせられて、専ら士気昂揚に努めた。警察とも連絡があったんでしようね、巡査部長というのが来て、先生、壕隊長になつて下さいという。それで壕隊長になつて、それを六班に編成して、班長を置いて、そうして統制して、時どき作業に出すんですね、夜間はスパイを警戒して、入口を警戒するとかね、そういつたことが取られたんです。

わたしはこの壕に三月二十八日から四月の末まで約一か月いたんです。四月は三十日頃までいましたな。それから一回だけ爆弾が落ちたことがありましたよ。そのガマの付近にね。その硝煙が壕の中に入つて来て大変でした。上の岩盤が見えるんです。それは平たいのがね、それが落ちたらみんな即死だね、それが落ちはしないかと心配だった。

それから四月の半ば過ぎると、まあ二十日頃からですかね、戦車の音が耳の底に響くようになりましたね、そうすると兵隊の連中は、あれは友軍がアメリカの戦車を分捕つて来たもんですよといつていた。戦車の無限軌道の音が聞こえて来るんです。

それでちやうどその頃だな、戦艦大和がやられたのは。それで情報が首里署を通してわたしの耳に入つて来たんです。ところが事実とは反対だね、大和がやられたのではなく、大和がやったという話。全くかえった情報を僕に言わしたんです。だから後しばらくの我慢だと。いわばわたしも戦犯ですね、わたしもやられたということとは全然知らなかった。それで僕も情勢がわからんもんだから、そ

れをそのままみんなに話して聞かした。

その壕には最後まで、一人も負傷者がなかったわけです。全員無事。四月の末まで、四月二十七日頃ではなかったかな宜野湾、浦添戦線から撤退して来た日本軍がそこを占領した。一般民は出て行け、と命令してですよ。それから兵隊が入って来た。

しかしどうしたのかわたしの家族だけ残された。先生はいっしょにここで残って下さい、というんです。一体僕は何をするか、そうしたら僕は猛烈なアメーバー赤痢に罹ったですよ、大変な。僕は腹を痛めたら、絶食する習慣をもっていた。一日絶食すると癒る、どんなに悪くても二日すれば癒る。だがこのアメーバー赤痢は三日経つても癒らん、もう三日目からはふらふらしている。水もない、その間一物も口にしない、もう最後の四日目からは歩けんぐらいふらふら。そうして四日絶食したんで、やっと癒った。それでも足腰も立たんぐらいふらふらしているもんだから、もう使えないと思っただろうな、先生も出て行っていいですよ、とまったんです。それでわたしは壕から出て行っただけです。

そうしたら弾が降る、わたしは道を歩けない、疲れてへたばっているから。匍匐のようにゆっくりゆっくり歩いて、やっと辿りついたところが首里城。実はね、わたしがガマにいた時に、わたしの教え子の師範学校生徒、四、五名、鉄血勤皇隊に編入されて、この連中が毎日わたしの慰問に来る、毎日全員そろってね。その連中が慰問といって煙草を持って来てくれる。まあ、その連中の顔も見たいということもあつたんだらうね、やっと師範学校の壕まで辿りついた。

でもたくよりに、ボンボン、ボンボンと聞こえて来る。

上陸した米軍の攻撃は、中頭からの攻撃です。わたしが金城に下りた時は何時頃でしたかな、とにかく午後ですよ。ここは弾の死角になつていてと思つたからね、もう今までの疲れと共に、ひとつには睡魔が襲つて来た。家族全部で、金城の町に入つたら一人一人通らんですね。それである屋敷のガジマルの下で何時間か、ぐっすり眠つた。

夕方になつて、そこから寒川サムガハに出て、松川を通つて、一高女近くに出て、その道は今もあります。真和志支所のそばを通り、真和志小学校の前を通り、それから圍場を通つて、今の沖縄高校の近く、そこを通る時にはもう晚八時か九時頃になつていました。ゆっくりゆっくり。いわゆるルーズベルト提灯という奴よね、照明弾が引つ切りなしで、まるで真昼ですよ。もうぜんぜんそれがつきる間がない。その中を家族三名トボトボと歩いて行つた。

そして辿り着いたところが今の沖縄女子短大、裏がわの下にある斜面、仲井間という部落。山手にある何の歩哨線か知らないが、歩哨線があつて、そこに衛兵所みたようなのがあつた。そこへ泊めてくれといつて一泊した。そして民家に行つてね、食べ物をかきしに。あの時は人參の生のを食べた、おいしかったな。そしてそこに一泊して翌日は島尻へ行こうと思つた。そうしたら翌日は大雨降りて、また津嘉山街道に弾が落ちるのを見たら、よほど覚悟をしておらねばそこは通れん。ひどいんですよ。それで兵隊に訊いたら、一日に何往復もするものがあるが、なかなか当りませんよ。まあ、当るといふのは運が悪いんですよ。先生方もそれをあきらめら

そして体操の先生、与那嶺さんにあつて、わたしも入れてくれませんかといつたら、どうぞ、といつてわたしを入れてくれたんですよ、勤皇鉄血隊の壕に四日入つておりましたな。師範学校の生徒もいっしょにね。その間、ほとんどこの連中は軍歌を高らかに合唱して、まあ悲愴といえは悲愴だったね。ところが四日目になつて、配属将校から、そこから退去するのを勧告された。ここは全部兵役に編入していただきます。だから言わばここは兵営と同じで民間人は入れないから貴方は出て行きなさいという。

それでわたしはそこを出て、ちょっと上にあがつて行つたんです。上つて行つたところは正殿のあるところですからね。首里城の正殿のあるところへ上つて行つたら、正殿が焼け落ちて、余燼がくすぶつておつた。五月の初め頃でした。

首里城の中から、歓会門を通つて、守札門を通つたんですが、歩哨が立っていて、そこを絶対に通さんという。それで僕は「金城町に行くんだが通せ」といつたら通さん、それでまた引返して今の琉大の入口近くですよ、そこへ行って、それから林の中を通つて、記念運動場（現在琉大の建物が立っている）のそばの道、そこを歩いて金城町へ下りて行つたんです。その頃は、攻撃はこうでしたよ。すでに宜野湾は占領されて、浦添も大分占領されているんです。そこから大体臼砲とか、迫撃砲を撃ち込むんです。時どき榴散弾が来るですね。それから神山島、チービシからは、臼砲でなかつたかね、ボンボン、ボンボンと大鼓をたたくような音ですが、アメリカの砲がチービシに据えつけられて、それから首里城攻撃です。もう音がまるで大鼓をたたく音です、遠くですよ。祭の大鼓

とれたら、何でもないですよという。

ちやうどその時、衛兵所の伍長という奴が、僕に、スパイの女を掴まえて来たんだが見てくれませんか、というので、僕は、僕が見たつてスパイらしい女が判定できるはずはないではないかといつた。いや、わたしもスパイではないと言ひ張つたんだが、掴まえて来たもう一人の伍長が、これはスパイと頑張つておるから、スパイではないという証明さえしてくれないんですよ、というもんだから、じゃ、行きましようといつて行つた。一人積徳女学校の生徒、一人は首里高等女学校の生徒、両方とも三年ですよ。名前はききませんでした。宜野湾のもので、四月一日にアメリカが上陸したので、家族とちりぢりになった。本人たちは、家族が東風平におるというもんだから、山と山との間を通つて、繁多川からまっすぐ仲井真に来た、歩哨線があるということ知らなかつたんですよ、それでそれに引つかかつて掴まされた。掴まえた奴は、てっきりこれはスパイだといつてきかない、その時は、わたしが前でやられたように、言い出したら絶対きかない、弁解無用でどうにもならないんですよ。女学生もモンペを着て防空頭巾で、一般と異なるない、若い女だから、学生だからということも問題ではないです。それで僕は、事情を訊いて見たらスパイ行為は何もしてないから、これは絶対にスパイでないといつて、やっと釈放されたですよ。そんなことがあつて、そこで一泊した。

そしてわたしは弾の降る中を。その頃から僕の案内はずい分弱つてね、道行くのもゆっくりしか歩けん。小学校の生徒たちもその道を走って歩くんですよ。わたしは、母も家内も三名肩を組んで、

もう当たら三名いっしょだという、ほんとに決死の覚悟でゆっくりその道を歩いた。幸いにわれわれは、弾がよけて通ってくれたな。

その日の夕方、東風平村の世名城まで辿りつきました。ただ歩いた。弾が当たったら運だと諦めてね。東風平への道はその道一本しかないから、隠れもしない。

あの道は一間おきに弾痕があった。津嘉山部落を通った時は弾は長堂部落に集中していた。昼でしたよ。弾そのものは落ちるのが見えませんが、落ちたら何か吹っ飛ばんですよ。あれでわかるんです。音もしますよ。ヒューンとね、これは鳥尻行つて経験してからですがね、大体午前六時半から三十分くらい、午後六時半から三十分くらい、弾の小休止がありますよ、あとで気がついた。何もしらんもんだから、とにかく当ると運だと思つて、三人肩を組んで。

その間に僕は、ひめゆり隊にあつていますね、三十名くらい。隊を組んでね、そしてやはりその子たちは歌をうたつてね、移動するようでしたね、どこかへ。もう部隊だから話はしなかったが、世名城に行つた日は、避難民はあまり通らなかつたな、わずかしかならなかつた。それで真玉橋から行こうとしたが、真玉橋はすでに爆破されて通れないんですよ、どうしてもその一本しかなかった。まあ、遠廻りすれば、もつと南風原に道があつたんですがね、もうそこまで来ると、早く行くには津嘉山街道通らんといかん。宮平廻り、兼城あの辺から行けば何でもなかつたですが、わたしはもう早く向こうへ行こうと思つて、決死のつもりで津嘉山街道を行つた。歩く人はみんな走つて通るが、僕等は三名ゆっくり歩くので何かな

わたしの隣りの墓にこの連中は郵便局かどこかに勤めていた男だが、名前は何と忘れたな、これは二十代のものだがね、ちようどそれが水汲みから帰る時分榴散弾の音がパラパラとときこえたよ。そしてなかなか帰つて来ない、行つて見たら、もう死んでいる、やつぱり運ですね。

そしてわたしは自分のいる墓を何か所か変えた。後では糸満の憲兵分隊のいる隣に住んでいた、糸満に憲兵の分遣隊があつたんです。それが与座に移つて来ていて、わたしは与座での最後はそのそばにいた。ちようどその頃、高嶺村の兵事がかりが各壕を廻つて召集していたが、わたしは年寄りの母をつれていて、病気の妻を連れていて、こんな状態ではとても召集に応じられないと思つていたので、難題を吹っかけて、将校にするか、将校だつたら行くが、軍刀もあるしといつてね。

そのうちに家内はだんだん弱つて、とうとう五月の三十一日にそこで死んだんです。五月三十日の晩でした。それで弾の降る中を、KSさんと、碑まで建てましたよ。戦後それを取りに行つたが、ちゃんと残つていました。遺骨を取りに。鉛と筆とを借りて来て、わたしが墨で書きました。その時は、わたしはこう思いましたよ、家内は先きに死んでよかつたな、と。あと僕はどこで野垂れ死にするかしらん、誰も死体を収容してくれない、先きに死んだのは、ちゃんとこんなに家族が葬つてくれて、これは幸福だと思つたんです。今から考えると可哀想ですがね。衰弱ですね、心臓が弱つていたんですね、無理な生活ばかりしてですよ。普通の生活であつたらとても死ぬような病気でなかつたんだよ、もともと

思つたでしょう。

そして世名城の民家に約一週間泊つた。そこでの記憶はあまりないですね、ただ沖繩那覇市出身の現地召集の兵隊が病気になるてひよるひよるしておるのをよくあつたがね、死んだかもしらんなあれ、名前は山田といつていたがな。

それからすぐ手前の与座に。与座には、有名な与座川というのがあるでしょう。すぐそのそばにね、当時高嶺の村長していた金城という人の家があつたんです。そこに移つた日に、わたしは、その人の家に泊つたんです。その頃そこには弾は全然来ないんです。そういえば、世名城にいる時も弾は来ない、だから比較的のんびりしている。食事もちやんと釜にたいいていた。世名城から与座は約半里あるかないくらいです。そうして与座に行つた頃にも、たまに榴散弾がくるくらい。わたしは金城さんのうちに二、三泊ぐらいたつたしは、そこに泊つてもいいんですかといつてね、ちよつと知つていたんですよ。わたしが子供の頃、金城さんが那覇のわたしのうちを借りていたことがある。それでわたしを覚えていくれたんですよ。その後民家は危いといふんで、その近くの墓の中に入つていた。食事は米を持っていましたよ。そこで一番の問題は水だね。水は何で飲むかといえ、あき瓶、一升瓶、キッコー萬でね、あれを一つ二つ持つていたら水に困らんですよ。それで最初は与座川がそばにあるから潤沢につかつた、ところがそこから越して墓に入つてから水汲みに行くのが問題だ、いつ何時弾に当るかわからん。それでわたしは、一回こんなのがありますよ。水を汲んで帰つて来た。

健康な体でしたから。亡くなる時は何も言ひのこしません。あの頃が一番心配は、弾の来ること。だから願ひは、弾の来ないところに移ることだつたんです。その頃から弾の来るのが激しくなつて、人はどんどん南へ行つて少くなつていた。その頃はじめて見ました口ケツト弾という奴ね。

それからあの辺にいる日本軍の野砲ですが、肉眼で見えるところにいるんですよ、敵が。そこへ向かつて大砲を撃つんです。見ていたら傑作ですね、そこへ向かつて大砲を撃つんです。撃つた瞬間にさつと逃げるんですよ、みんな。しばらくしたら、電波探知機で察知できるのかな、すぐそこに弾が集中する。そうだから撃つたらすぐ逃げるんですよ。あんまり弾が集中するので、そこにいたら即死です。そして日本軍から攻撃らしい攻撃は全然ない。それでわたしは家内が死ぬ前ですね、米が切れて、芋は沢山あります。わたしは芋を食べるが、家内はどうしても芋は食べない。お粥しか食べられん。米はつかい果してない。それでわたしは、兼城小学校長はよく知つていましたから、兼城まで訪ねて行つた。学校の近くの壕に訪ね当つて、米があつたらわけてもらいたい、と頼んだ。ところがその頃は米がないから芋を食べていた。借りるところがない、仕方ないから引つ返していた。それで途中でトンボがわたしを見たから、旋廻をはじめた。これが旋廻をはじめたら、必ずそこに弾が来るんですよ。それでわたしは急いで、ちよつと小高くなつたところへ逃げて行つたら、そこに壕があつた、誰も気がつかないところに。入つて行つたら、そこは日本軍の食糧倉庫で、米も沢山ある。そこへもぐり込んで、米を買つて帰つたんです。それは玄米ですか

らね、一升瓶に米を入れて、竹で搗くんです。それを長くつづけておると完全に搗けるんですね、それでお粥をつくる。その米取りは一回だけで、その米がなくなる前に家内は死んでいった。米は袋のいっぱい、一斗くらい。

五月の半ばぐらいでしょうね、二十日前後ですかね、その頃KSさんから、憲兵軍曹という男が訪ねて来て、僕についているいる訊いたというのを聞いたんです。

憲兵隊の壕の近くにわたしがいた頃、KSさんと別れて、五月の二十日すぎていたのではないですかね、五月の二十七日は海軍記念日で、日本の大反攻作戦があるということがあってね、僕はそれを期待しておったです。その前、あの頃は梅雨、例の小満の時期でね、雨が連日のように続いたな。

その頃日本軍のちよつと頭が変な奴がいたな、彼が脱走兵として、憲兵に折檻されておる。角材で殴っておったな、いたいたしくて見ておれなかった。そして何か白状させようとする、頭が変だもんだから、まともなことを言えないんだよな、それでまた殴る。二、三日経ってからだったな、この男が墓の庭の古木梯子にしぼりつけられたまま、まあ、夜中大雨でね、その雨にうたれたまま翌日は死んでいたな。可哀想でした。あの時わたしは軍隊の折檻をはじめて見た。殺されたのは軍服もつけていないので階級はわからなかった。その男は、そんなに若くなかったから、多分召集兵だったと思つた。折檻したそ奴、憲兵軍曹だったよ。後でまた、喜屋武岬でいっしょになるが。

与座川というところですね、後では大変でした。あの移動する前

真栄平では民家の馬小屋です。二泊しました。そしてちよつと真栄平に行った頃ではなかつたかね、新垣部落が猛烈に爆撃されていった。そしてわたしは、その真栄平から移動してほんとはどこという当てはないですよ。ただ行きついたところで泊るという形です。

それでそこから移動して通る途中で、中頭の何校か、小学校の教頭で安室さんという人にあつた。この人はね、わたしは中頭で小学校の教員していた時、体育関係でよく顔を合した。この人は現地召集で兵隊。毛布二枚を、嘉手納君、この毛布を君にくれよう、といつてね、安室さんは、新垣部落にいた時、大爆撃された。自分はこの毛布二枚を被って、それで命が助かった。この毛布は嘉例なもんだから、君にくれるといつたので貰つたですよ。この人は戦死して帰らんですよ。

そして真壁を通って、波平という部落へ行ったんです。直線距離にしては、真壁から波平まで半里はないでしょう。すぐ見えたんですよ。わずかだから。そこにはね、約二週間泊りました。

波平という部落へ行った時には、まあ、壕というものは部落にはない。その近くの山には部落民がつくった壕があつた。それがおおかた兵隊たちに取られていた。那覇とか、首里から来た避難民たちが、行くところがないから、民間の家の中に避難しているんです。わたしは、便所と石垣の間に自分で囲いをして、そこにまあ、壕のような真似ごとをつくつて、そこにいた。そこにも部落のはずれに泉がありましてね、水汲みによく行きました。暗い中にね。ところがある早朝一斗甕を担いでね、水汲みに行った。帰りに道の真中にまるいものがあつて、それにつまずいて、倒れてその水甕を割

あたりから。大変というのは、水汲みに行くと、撃ち込まれるんです。每晚そこに人が二、三人死ぬんです。そこへ向かつて弾が来る、その泉に向かつてです。それでねられるものは皆即死でしょう。その血が、与座川の水を汲むところへ血が流れると、間違いない、翌日はウジが湧くんです。ウジが湧くのは非常に早い、与座川は五月半ば頃からはそうなっていました。うっかり水が汲めない。

それから高嶺村行つてからもう一つ苦労したのがあつたな、お粥を炊かなければならない。芋を煮なければならぬ。鍋は持つて行つたと思う、その点ぜんぜん気憶がないね。ただ困るのは火を燃やすこと。それで、煙が立たないようにするためには、炭をつかわねばならない。わたしは余所からコンロを借りて来てね、焼け跡へ行つて、炭をいっぱい拾つて来る。それでその炭を燃やした。普通の人なら食べないでもいいが、わたしは病人がおるから、ちゃんとしてやらねばならぬ、そのためにはぜひ分苦勞しました。焚き物を捜がす、物を炊く。

わたしは母をつれて、高良上というところを通つて、八重瀬を通つて、そして反対がわの真栄平というところがあるが、そこに泊つたんです。そこへ二泊しましたね。

その頃ですよ、山部隊長の名義でね、公示されていた。石垣とか民家の壁にね、玉城村とか、佐敷村、あつちへ立ち退きせよ、あの辺は安全だからとね。後で聞いた話だが、玉城、佐敷近べんでは、真壁近べんに移動せよ、向こうは安全だからと。ちぐはぐなもんだでね、途中でその連中が行きおつて、右往左往しておつたそうです。どこへ行けば、一体いいんだといつてね。

って、汲んで来た水を全部こぼしてしまいました。よく見たら、そのつまずいたのは、生首でした。砲にやられて、首が吹っ飛んで、皮が全部はがれて、まるで肉屋にさげてる肉ですよ。ただ頭部とわかるだけで、もう完全な肉。大変悲惨だったな、凄惨といつたが適当でしょうな。

それからね、こんなこともありますよ。爆撃されて、砲撃されて吹っ飛んだ死骸が竹藪に引っかけかかって、腐つてね、臭気が甚だしい。処置できん。ちよつとその頃、黄燐弾が来て、部落が焼かれたことがありましたよ。その時、焼こうと思つてしたのか、そういうこともありましたよ。

波平にいた頃からは、しょつちゆう攻撃されて、煙が出てくるから、その時は堂どうと火を焚いて飯を炊いていましたな。もうその頃からですよ、例の小休止の時間がわかつたのは。その間に、サツと芋掘りに行くんです。朝の六時半頃と、夕方の六時半、南京袋にいっぱい芋を掘つて来るんです。有りますからね芋は。大豆ね、大豆は戦争中だからそう思つたか知りませんが、あれをお汁に入れたら、まるで鱈節のダシみたような味が出ましたな。それにラッキョーがある、キヤベツの残りがある、葱があるでね、もう食べ物には困らん。芋はふんだんに取れる。米も少しならあつた。砂糖はある、メリケン粉はある。それでね、饅頭を作つたことがありましたな。まあ、いろいろつくくるくらい材料は持つていた。

そしてわたしは大きな鍋に、持つて来ただけの芋を一回に煮るんですよ。そんな戦争の時に三度三度の食事は考えられません。しよつちゆう食べておる。大きな鍋に煮てね。通る人みんなにくれ

る。また夕方掘りに行って、また煮てそれに入れておく。味噌汁をつくる、味噌汁は兵隊なんか、なかなか飲んだことはないんですしね、負傷兵なんか通る時は、止めては味噌汁を飲ました。非常に喜んでね、生きた心地がしますよってね。

その部落にいた時、恐怖の日があったな。三方から艦砲の集中攻撃をされた。東南西。その攻撃は地面を耕すように来るんですよ。大変な攻撃であった。避難民は右往、左往、三時間ほど、そんなに長くはなかった。その時部落のほとんどもがやられたんではないかな。

一回はこんなことがありました。わたしの避難場所は屋敷内にくくってありましてな、そこに家があつて、その後が竹藪があつた。その竹藪のそばがわたしがいたところ。その家のすぐそば、わたしは竹藪を経だてたすぐそば。距離にして一間ちよつと。そこに艦砲が落ちて炸裂した。もうわたしはあの硝煙の臭いが、頭にこびりついて、臭いが頭にこびりついたというのはい方だが、それが数か月取れなかった。あの臭いが。そしてその時は大変でした。竹藪の竹の葉は全部なくなつて、弾は何も来なかったですよ。爆風もそれが遮ってくれてね。それでわたしの家族は安全。しかしその前にあつた建物が、壊れてすぐべちゃんこ。その中に十名ぐらい人がいた。圧さえられて泣き叫んでいるんですよ。それを近くにいた人たちが助けに行った。その時、黄燐弾が飛んで来て、すぐ燃えたですよ、その爆風で壊れた家が。全然手をつけることができん、泣き叫んで灰になった。人間がね。そういうこともあった。大変でしたよ。向こうに行つてからの弾というのはね。

ろに何かある、と思つているからね。それから夕方近くまで、待つていた。もうアメリカさんの行動が見えるんですよ、最後までいたのは僕ではなかったかな、そこに。

それでわたしは移動しようと思つて、兵隊がいたところに行つたら、食糧がドッサリある。米もいっぱい詰める。罐詰もいっぱい詰める。もういろいろのもの。そこにいた兵隊は一個分隊ぐらいでしたよ。小隊ではない、分隊ぐらい、五、六人ぐらいでした。その連中がどこから持つて来たかしらんが、食糧を貯えている。それだけの兵隊で食べるものか、あるいは他のものに補給するものであつたか、それはしらんが、それを持たないで、どこかへ逃げている。アメリカ兵がすぐそこへ来ているので、食糧を持つことなど考えない。泡を食つて逃げたのだから。

それで、それをそこに置いておいても腐らすだけ、僕は取つてそこから逃れた。僕は最後までいたからそれをやったのさ。母はわたしを信頼して何も言わない。そうしてわたしはその時間を利用して、そこは死角と思つたらゆっくり、遮蔽物が何もないところは母の手を取つて小走り、という形で移動した。

その道をそのまま真直ぐ行つたら大渡・米須、ひめゆりの塔のあるところですよ。わたしはそこへは行かないで、山をつつ切つて行つたんです。あれは何という部落ですかね。とにかくその部落に行きましたよ。行つたら、あれは二十軒ぐらいの家、いや屋敷跡に、家は全部焼かれて、屋敷跡といった方がいいだろうな、そこに一泊しようかと思いましたが、思いなおして、喜屋武まで直行することにした。

それからこんなことがありましたよ、この部落にいる時に。わたしがいる付近に甲辰小学校の六年生とかいていたな。その子に、甘蔗食べに行こうかといつてね、その子と甘蔗取りにいっしょに行つたんです。何か子感というかな、まあ、自分の感でしようね、いつ弾が飛んで来るか知らんというんで、中頭から見たら死角に当るところで、ここがいいからここで取ろうと取つていたんです。畑で芋掘りとか、野菜取りとか、二十名ぐらい兵隊も一般民に交じつて、取つていた。その時、榴散弾が飛んで来た。僕等のところは立つていたら、頭はやられるかしらんが、伏せたら何でもなかった。その子供を押し倒して僕は伏せたよ。ほんの一瞬ですよ。パラパラ、パラパラと、三回ぐらい音を立てて、弾がこう散つて来るんですよ。しばらくして顔を上げたら、今まで畑で取つていた人たちが、全員死んでいた、全員。一人も残さず、榴散弾でね。

そうして六月の十八日、二十二日に捕虜になったから、十八日までその部落にいた。わたしが移動したのは、十八日だったかな、その日の屋敷には、米軍が真壁部落まで来たんです。もう肉眼で見える。小銃弾が来る。そうしてわたしがいる近くに兵隊が、壕をつくつてね、石で蔽うたりして、奇麗につくつていましたよ。これだったら大丈夫だと思ふぐらいの。兵隊は小銃弾が飛んで来るようになったら、もうほんとどこに行つたか一人もいない。そのあと避難民はほとんどその部落から逃げていた。アメリカ兵がすぐそこまで来ておるからね。

わたしは、今行つたら危いと思つた。小休止の時間があるからその頃まで待つ。もう一つ何か浮かんだわけだ。兵隊たちがいたところ。ちやうど喜屋武部落と喜屋武岬へ行く道と別れ道がありますね。そこへ行つた時に喜屋武方面から兵隊が二人来た。晩暗い時でした。それで僕等と出合つたら、彼らは他府県出身の兵隊でしたが、どこへ行くんですか、と訊くので、僕は喜屋武に行くんだと言つた。そうしたら兵隊たちは、もうあそこは連日のごとく大変な死人が出る、向こうへ行つたら危いですから、行かない方がいいですよ。じゃ、どこへ行つたらいいか、と訊いたら、この道を行くと喜屋武岬の海岸へ出るから、それを行つたら安全です。それでその兵隊に教えられて、僕は喜屋武岬へ行った。

喜屋武岬行つたら、崖になつておるんですよ。そこを下りる。僕は母をつれて、崖の下りやすいところを下りて行つた。割り方下りやすいところがありました。わたしは崖を下りて行つたら、泉の流れているところが一か所あつたよ。その近くに海軍の望楼があつた。あの望楼は、喜屋武岬の真先きといつたんでなかったですか。そのすぐそばへ下りて行つたんです。そして、今までの経験では、一番大事なものは水と思つているから、その泉のそばにわたしはおつた。

そこに行つた時は、わたしは、米はまだ沢山持つている。ミルクも持つている。それから砂糖とか、味噌とか、あるいは石鹼、齒ブラシに至るまで持つている。しかしそこに前からいた人たちは、食べる物は何もない。そこから先、食糧さがしに行くところはない。有るのは海岸の藻しかない。そこでわたしは大きな問題がある。燃やすもの薪ですよ、その岩の出られるところに行つて、何かの葉の枯れたのを取つて来て、燃やして、炊いていました。

二、三日後アメリカが崖の上まで来た。出て来い、出て来いという。海には汽船が浮いていて、マイクで、出てこい、出てこい、という。そして水陸両用戦車がすぐ近くまで来る。もう絶対絶命ですよ。だから兵隊たちは、一般民は早く出て行って下さいというんです。一般民には何もせんはずだから、といってすすめるんです。兵隊が相当いましたよ。そうして二十日すぎからは、自決する音がきこえるんです。手榴弾を炸裂させてね、やるんです、自決。

わたしは最後はね、一つの穴に県庁職員も入れて十二名おりましたよ。それでわたしが手榴弾一箇持っている。軍刀持っている。そのほかに手榴弾持っているのがおる。小さな穴ですからね、手榴弾二つでは全員即死できる。自決するか、最後の評定を開きましたよ。この十二名、死のうと思えば、手榴弾二箇で大丈夫だが、やるか。ところが人間最後になれば考えますよね。それで結局評定の結果は、一応出て見よう。そうすれば、何かまたやる機会が出るかもしらんから、一応手を上げて出て見よう。それで手榴弾を捨てたんです、軍刀もね。

そしてわたしが出たのが六月二十二日、昼だ。十二名、(恥かしいなあ)ハンケチを振って出ましたよ。上って行ったら、西がわに低いところがありました、そこから上って行ったら、それで米兵につられて畑の畦道のところでしたらべられた。男は全員裸で、女は三名いたがモンペーでそのまま。男は禪一つ。

その時見た死体。わたしは、沖繩に人間がこんなにいたかな、というぐらいの死体でした。一体沖繩に人間が何名残ったかなと思っ

したね。そうしてそのまま行ったら、もう一人教員がいたんですがね、わたしが知っている、それでいくらホッとした。それでもこの人と僕と二人だろうと思つた。早く何とかしなければならんと思つていたんです。その頃わたしはまだ中村です。

そしてその日の中に(二十二日)、糸満街路に沿った豊見城村の伊良波という部落へ。畑の中に金網を囲ってね、南から捕虜になった連中皆、そこに收容していた。そこへ行ってはじめてホッとした。七、八十名ぐらいの教員がいた。その中には有名人もいますからね、そしてこの連中は、ほとんど野嵩に送られた。わたしが野嵩へ行ったら、すでに平良辰雄さん、山城篤男さん、仲宗根政善さんといった方々がいた。

最後の評定開いた時に、捕虜に教員が一人もいなければ、自決するつもりでしたが、卑怯だね、のがれてやつつける機会があるんだと思つたのは嘘で、忘れてしまつてね、みんなの顔見たら。

新垣の爆撃は、わたしが波平へ行く前、六月の二、三日ぐらいですが、その前日ぐらいで、六月の一日ぐらいではなかったですかね、わたしは波平に約二週間いましたから。六月一日前後だろうと思ひます。

真壁も通つた。真壁の部落は、全部焼かれた。真菜平という部落は、人がちよつと残っていました。それで、その間に感じたのは、神経が痺痺して恐くないんですよ。波平の部落に行つた時、庭の、畑の真中にガジマルが一本生えているのと、同じなんですかね、人の屋敷ではあるが周りは何も無い。そのガジマルの下に真昼、弾が来る中に、簾を敷いて、ぐっすり二時間は眠つた。そ

た。ほんとに屍累累とはあれでしょうね。それで屍体が何日かしたら、こんなに膨脹、れるでしょう。水ぶくれや、土左エ門というけれども、もう(そこでは声が非常に感情を昂らせて言われた)陸の屍体は、紫色になって、膨れてね、物すごく大きくなるんです。腐敗寸前は。悪臭が鼻をつく。

そこで十二名調べられた。わたしと、比嘉仁エイという人と、その人は名護の人、それから村吉さんと、その二人は県庁職員でありました。三名は妖しいと思つたのだらうな、他の者はよろしいといつて洋服をつけさせた。しかし僕等は、お前たちは服をつけてはいかんという。三名だけ裸のまま荷物を持って、つぎの審問所に連れられて行つたんです。

それで僕は母にこういった。ひよつとしたら教員で捕虜になつたのは、僕一人だけ、そうなつたらこんなに恥かしいことはないから、嘉手納と名前は言わないで、中村ということにすると。

二回目の審問で、村吉さんと比嘉さんはその後簡単に許された。わたしはどうしても許さないんですね。お前は日本人だろうと繰り返して問う。そのアメリカさんは日本語が非常に巧かったな。襟章見たら小尉のようでした。それがわたしを追及、日本人だろうと。わたしはそうだと言おうと思つた、日本人であるから。それでわたしは、かたくなに黙つておつた。幸にゆるされた連中みんな、これは沖繩人ですと証明してくれた。今度は、職業は何であつたかときかれました。教員であつた、と答えた。それでは天皇を神様として教えたか。教えた。現つ神と出ておるから、その通りに教えた、と答えた。まあ、とにかく、きつい訊問をされたが結局ゆるされま

れぐらい無神経になって、弾が来るのが怖いという気持は薄らいでいましたよ。あの首里の鉄血勳皇隊の壕、直撃弾食つても絶対安全といわれていた時には、壕から一步でも出るのは非常に怖いんですよ。それが島尻へ行つてあとからは、もう壕はない、隠れるところはないですから、人間はだんだんそれに馴れて来る。もう向こう行つてからは平気で歩く、そうして今のように寝ることができた。真昼でね、弾が来ても、そういうふうに変つて行く。ずっと緊張していたら、恐らく持たんでしような。

黄燐弾は、わたしが見たのは、それが炸裂して四方へ散つて、そこですぐ燃える。これは飛行機から落すのではなく、艦砲で撃つんです。わたしが見たのは、あの人が圧さえられた家ですね、人を助けようとして二、三人で火を消そうと棒でたたいたんですが、あちこち芽について消すことができなかったですね。

榴散弾は、或る一定の距離へ来ると炸裂するようになっていてのではありませんか、パラパラと四、五回来るんです。ロケット弾は破裂しないものが、与座で地面に突き立ったことがありましたよ。